

大隈邸時代の山本宣治



佐々木敏二

山本 宣治

1

満十六歳の山宣は牧野虎次牧師その他の人からの紹介状を胸にして一九〇六年一月九日園芸家を志して上京した。当時敬虔なクリスチャンであった山宣の日記には毎日聖書の一句が記されていた。京都時代・神戸時代に組合教会で育った山宣は上京直後の日曜一月十四日には靈南坂教会の礼拝に参加している。

「一月十四日(日曜)
神を己が力となさぬ人を見よ(詩五二・七)
今日は乃木將軍凱旋の日なり……途上近衛兵の多く整列せるを見る。靈南坂教会に到る

九時半頃なり松野(菊太郎)氏の聖書講義をしばらく聞きし後、礼拝始まり、……小崎(弘道)牧師の説教『犠牲』……説教終りて後、洗礼及入会式あり、次に聖餐式ありて余も加はるを得たり、……」

一月十七日に大隈重信邸に園芸見習として入ることに決定し、十九日より大隈邸に住み込むこととなる。二十一日の母宛の書簡には当時の感想が詳しく書かれている。

「京都市新京極錦上ル

ワンプライス・ショップ御中

明治三十九年一月二十一日

東京牛込早稲田大隈伯邸内

拜啓おかげを以て一昨十九日より当家の御厄介に相成事に候。……扱小生現今の生活は殆んど只今に於ての理想的の生活と申すべく、亦身体も最健康に暮し居候へば御安心被下度。次に只今の生活状態を申上べく候。先づ小生の居室といへば玄關の傍なる清潔なる明るき室にて六畳敷、夜電気灯眩ゆく、此室は小生と同年の独逸語学生と小生との二人にて占領仕居候。……朝は六時半に起床……顔洗ひて後温室へ温度を調べに行く……それを見て帳面につけ戻り、飯を食ふ、食堂は片隅に蠅入らずあり其中に茶碗及びおかず入りあり各々勝手に出して食ひ又片付けておくのにて、朝は味噌汁、昼は焼魚、夜は豆腐に魚の煮たの位……勿論三度共あつ御飯に候。飯終りて休憩後、服を改め花園に出で温室へ行きよしずを巻き上げたりして内、園丁続々出勤し来り候、園丁は総計十七、八人御座候……。昨今は蔬菜・菊・果樹の仕事殆んどこれなく温室の用ばかりにて……蘭を植附る事に手伝居候。皆温室の仕事にて寒さ知らずに候……。夕方は早く園丁共も退園し、小生等も四時半頃に身をしましそれより入浴に參る

の候。……入浴はてて夕飯を喫したる後は玄関へ行って新聞(何新聞にてもあり)を借り来て読まう共、机にもたれて読書しやう共自由な候。この暇を利用して英語夜学に行くべしと伯爵の仰せこれあり……或は神田錦町の正則英語学校に行かも知れず候、どうやら此通学は当家より支弁して呉るらしき口ぶりに御座候。夜九時提灯を持って温室の温度をしらべに参り候。……夜十時に就眠……毎日の生活は以上の如く非常に結構すぎる位に候。……前にも当家の世話になりし園芸家にて当家より紹介状を貰ひて渡米せし人あり候由にて、伯爵も他日渡米の時便宜とふべしと申され候。……尚小生撰生に注意致居候へば母上御休心被下度候。……牧野先生には不取敢礼状差上候へ共、若し御会ひに相成候はば小生の近況よろしく御伝へ被下度願上候……」

この手紙の通り二月一日から山宣は正則英語学校に通いはじめた。病弱のため神戸中学校を三年生の時に中退した山宣にとっては、渡米の夢を実現させるためにも英語の勉強を続けることは必要であった。山宣は毎晩疲れた体で神田まで通学した。

山宣はこれより二年前の一九〇四年(明治

三七年)に東京興農園という種苗商に住込み奉公をしたことがある。その年の六月二十七日の手紙では「興農園が品質精良廉価クリスチャン的営業をして居るなら兎に角、実際は品質粗悪価廉ならず、家は治まらず、営業は只吾が懐を肥やすばかりなる俗人的否な悪魔的の商業」と母に記している程で、そこでの労働条件はひどく悪かった。そこでの生活は、山宣に、労働強化に対する奉公人の対抗策としてのサボタージュなどを経験させた。六月五日の金銭出納簿には平民新聞第三十号を買ったことが記入されている。

興農園時代にくらべると大隈邸の生活は、労働条件もよく、山宣に読書の機会を与え、社会に対する意識を目覚めさせるのに大いに役立つたといえる。

2

「二月十日(土曜)……学校よりの帰途神保町にて蕎麦二杯を喫したるが夕飯過食の故か胸苦しく、帰宅する迄漸次吐瀉したり、自今買食など慎しむべきなり、殊に昨今の如き東北にては餓死する人すらある時に。」

前年東北地方に大凶作があり餓死する者が

続出していた。山宣は自分の生活にくらべてこのように感じたようである。それから一ヵ月程した三月十日頃からの日記は、東京市電値上げ反対運動についての記入、進化論についての記入その他でにぎやかになる。

「三月十日(土曜)……学校の帰途古本屋を素見す、『種の起源』ありし所ありてはしかりき。……」

「三月十一日(日曜)……本日午後日比谷公園に電車値上反対第一回市民大会ありしが雨の為来会者少数なりし由……」

「三月十五日(木曜)……本日日比谷公園にて社会党主催の電車値上反対第二回市民大会あり、其解散後野次馬の為電車(街鉄)数台破壊されし由なり。……本日昼飯の際会計長塩氏より大儉約の為日むを得ず来月より給学費差止と言渡されたり。」

「三月十七日(土曜)……神楽坂の某書店にて『園芸の友』『社会主義研究』を求め帰邸せり。来月より学校を続けべきか否や未だ決せず。……」

「三月十八日(日曜)……暫時昨夜買ひし書等を読みつある内、三ッパンの間ゆる何所ならんかと門脇の交番に聞きに行てもわから

ず、今日電車値上反対の社会主義示威運動ある筈にて既に禁止されし由なるが、或は其の催しありて例の焼打騒動おっぼじまりたるならんかと想像せり。……今日上野に於ける電車値上反対運動は禁止されしが、其にも関らず多数集り一騒ぎありし由なり、愉快愉快大いにやるべし、蓋し市民自身の勢力を自覚せしならんか。」

山宣が市民の勢力の自覚と評価している市電値上反対運動とは、東京市の市街・電気・電車の三鉄道が三月一日それぞれ三錢均一だった運賃を共通五錢均一に値上申請をしたのに反対して日本社会党（堺利彦ほか）と国家社会党（山路愛山ほか）の共同ではじめられたものであり、十一日と十五日に市民大会を開き、十一・十五・十八日デモは暴動化して電鉄会社・新聞社をおそい電車を破壊した。軍隊と警官が鎮圧にかりだされた。値上案は二十三日に却下されたので一応の解決を見たものである。

また三月十七日山宣が購読した『社会主義研究』とは、堺利彦編集・発刊による創刊号（三月十五日発刊）であり、幸徳秋水と堺利彦の共訳による『共產党宣言』の全訳がはじめ

て収録されたものである。

この時期に山宣は社会運動や社会主義思想を吸収しはじめたばかりではなく、将来の生物学者への第一歩ともいふべきターウインの『種の起源』を購読しはじめるのである。

「三月二十二日（木曜）……夜音楽会へ行く途中神田古本屋にて『種の起源』二円四十銭にて求む。……」

「三月二十五日（日曜）……夜は日記を認め『種の起源』をよむ。……」

「三月二十六日（月曜）……夜は玄関に竹内氏・渡辺氏・高崎氏・春男君等相集まり、始めは養鶏談なりしが、鶏の種類改良―進化論―生物生殖論―猫犬狐犬妖怪談となり思はず夜深ししたり。……」

英語学校の方は大隈邸よりの学費支給差止のため四月一杯は中止する。しかし五月に入って父より「学校の可否は命ぜず思ふが儘にせよ」との手紙があり、父よりの経済援助で再び通学するようになった。しかし朝六時前に起床し日中は園芸夜は英語学校という生活では、教会に行く機会を作ることには困難であった。しかしこの期間に万朝報、太陽、新人、開拓者などを手あたり次第に読むという

生活が続いた。

「七月一日（日曜）……高崎ドクトルに内村鑑三氏著『基督教徒のなぐさめ』を貰ひよむ「不治の病に罹りし時」の所は丸上深蔵氏の事など思ひていと感深し、読み終らば送らんと欲す。」

「七月二日（月曜）……夜は玄関にて新聞・早稲田文学（イブセン記念号）・中央公論・ときのこと等よむ。……」

「七月五日（木曜）……近頃学校行の望み再燃し始む。正則予備校―青山学校―札幌農学校―農学士―渡米等。」

3

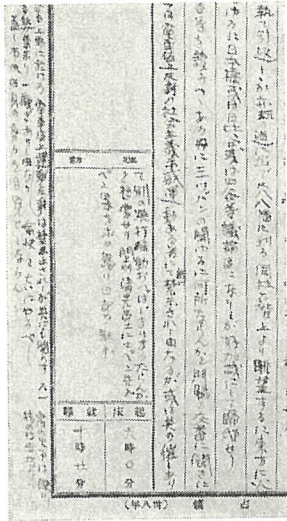
七月下旬になって友人を誘って教会に行く時間を積極的に見つけはじめた。教会は日本基督教会の富士見町教会であった。その時々説教の要旨を日記に記している。

「七月二十二日（日曜）……夜竹内君を誘って教会へ行く、演説者は田川大吉郎氏にて、青年の意気は消沈せりや」といふ題、往年の学生と比較して多くの点に於いて意気の消沈せるを見る、若し其言真なりとするも学生社会のみにあらず、現時全社会に通ずるの現象に

て、果して事実なりとせば、之に對する基督
教徒の責務、男女交際自由論、老輩の老婆心
は恰も酒飲みが我子に禁酒の勧めをするが如
しと説かれ、……」

「八月十二日（日曜）……夜竹内君と富士見
町教会へ行く、……演説（旅順役と人道問題
——田川大吉郎）、演説の要旨は……余輩ク
リチスヤンの戦争及び兵役に関する意見は何
所迄も非戦論を執るべきも、万一千戈に訴へ
ざるを得ざる時に止むを得ず兵役に従ふべき
者は彼の十戒を守る上に更に我財等を捨て犠
牲とすべき如く国家の爲には我生命をなげう
ちて働くべし、となり。」

「九月二日（日曜）……夜竹内君を誘ひて富
士見町教会へ行く、演説（甘んずべき非難と



3月11日付日記の一部

責任——田川大吉郎）、其趣旨は……基督教
徒を俗人が非難する言の内に甘んじて受くべ
きものは、其の一つは愚なるもの弱きものと
見なされること、聖書にある如く我等は此世
にありては愚なるもの弱きもの、其の一つは
愛国心薄しと称さるる事……此は基督教徒の
如く全世界万国を汎愛するものは一局部に對
する情の薄らぐ事の当然なる事……絶対的に
讚むべき現象ならず共亦悲しき事といふべか
らず、……一度基督教徒となりし後堪へ難き
迫害と誘惑の來るものなれば其に對して充分
の覚悟あらまほし、と、……」

この頃山宣の日記に市電料金値上反対運動
の記入が再び見られる。それは、八月一日に
三電鉄合併・運賃値上げが認可され、九月十
一日東京鉄道会社が設立されること
になつたのに抗議して運動が展開さ
れたからである。

「九月五日（水曜）……今日日比谷
公園に電車値上反対市民大会、本郷
座に演説会あり、其余波電車諸所に
てブチコワされ、就中銀座にてはコ
ワシ方激烈なりし由。」

「九月七日（金曜）……今夜も焼打

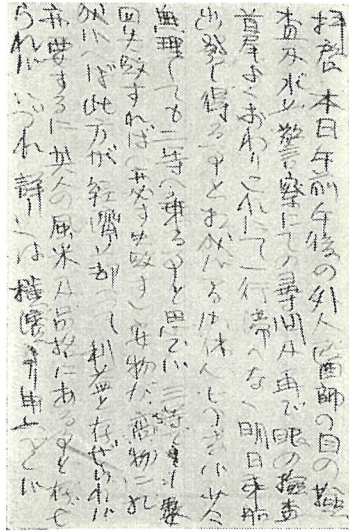
騒動ありし様子にて、電車も八時頃より通ら
ざりき。」

「九月八日（土曜）……外濠線駿河台の電車
に今夜大勢押寄せたりし由、其にてか今夜は
昨夜より更に早く七時半頃運転休止せり。」

「九月十一日（火曜）……今日は電鉄總會及
値上反対市民大会あり、焼打騒動あるべく予
期せられしも軍隊を繰出し鎮圧せし故、事
なくすめり、途上乘馬騎兵の追逼せるあり
き。」

しかし、この運動は参加団体が内部分裂し、
結局は押しきられて値上が実施された。
九月十五日の日記から当時の山宣の自分の
信仰についての評価がうかがわれる。

「九月十五日（土曜）……学校の帰途牛込見
附内にて救世軍の路傍伝道せるにあひ傍聴せ
り。勧告者及祈禱者の熱心なる態度或は滑稽
の感なきにあらずといえども、果して衷心よ
りかかるるべきか、さあらんには神恵を深
く被れるなるべし。さはれ余は熱くもあらず
冷かならざる偽善者なる哉。神よ余のぬるき
心に恵を与へ給ふて真に幼子の如きへりくた
れる心を持たしめたまはらん事を。……」



4月27日付の葉書

で鎌倉で休養生活をおくった。その時に大隈邸時代を回顧している。

「十月二日(火曜)……日記を読みしが、早稲田邸の厄介となりし事二百四十五日の内、蘭洗いした日が百三十四日、鶏舎勤務

二十一日、袋掛け二十四日、説明は七・八日、小使に五十六円の大金を両親より貰ひ、其他五

円二銭は中元祝儀及び西洋人案内等により入手せり。」

十月五日母より「相談すべき事もあれば、兎も角宇治へ帰るべし」との手紙を受取り、翌六日宇治に帰る。

「十月六日(土曜)……父上母上とあづまや叔母上と共に余の将来に付て相談す。余の意見も父母のも殆んど同じく、要するに何時までも大隈邸の居候で、うちより莫大の小使貰てそれで蘭の薬洗ばかりしておった所で始まらず、亦胃病になった所がつまらねば、それより矢張家にありて己が思ふがままに実地研究し見んことこそよかるべし、尚熟考する事とし、早稲田の方へ今一ヶ月余り其のままに

この少し前より山宣は健康をそこない家に相談をした。そのため九月二十一日母が上京する。

「九月二十一日(金曜)……母上の顔見ては悲しくなけれど何となくはふりおつる涙、ソナナことでは中々米國へは行けずと云はれたり、最も余東上以来涙を垂れしは始めてなり、四方山の話し、余の健康について其は単に神經のみにて医師に見て貰ふよりは一ヶ月程暇を貰ひ、鎌倉の建長寺へでも行って養生し来る方がよからんと云はれ、其事に決し……」

翌二十二日大隈邸に暇を乞い、十月初めま

しておく事と決したり、……」

その後山宣は、当時旅館らしくなりかけていた浮舟園の手伝をやりながら、園芸と養鶏の実地研究を本格的にはじめた。この年末から年始にかけて『種の起源』をていねいに読んでいることが日記にみられる。

一九〇七年(明治四十年)三月、結婚のため帰国していた親戚の石原氏より、山宣に渡米の話が持ちこまれた。

「三月二日(土曜)朝父上より書状。石原氏の勧告により宣治の渡米考ふべし、花園業に四五百円も投資すると思ひ渡米せしむべし、四月石原氏再渡米の節に同伴を請ふては如何、云々。非常に結構の仰せなり。カリホルニヤは排日運動盛んにして移民禁止法も通過せし今日なれば、晚香坡は否などとゼイタクは云はれず、飛立つばかり悦ばし、……」

この話が実現して、山宣は四月二十七日神戸発の常盤丸にてカナダ・バンクーバーに向った。以後五年間カナダでの労働者としての生活、苦学生としての生活がはじまる。

(校友・人文科学研究所嘱託)